

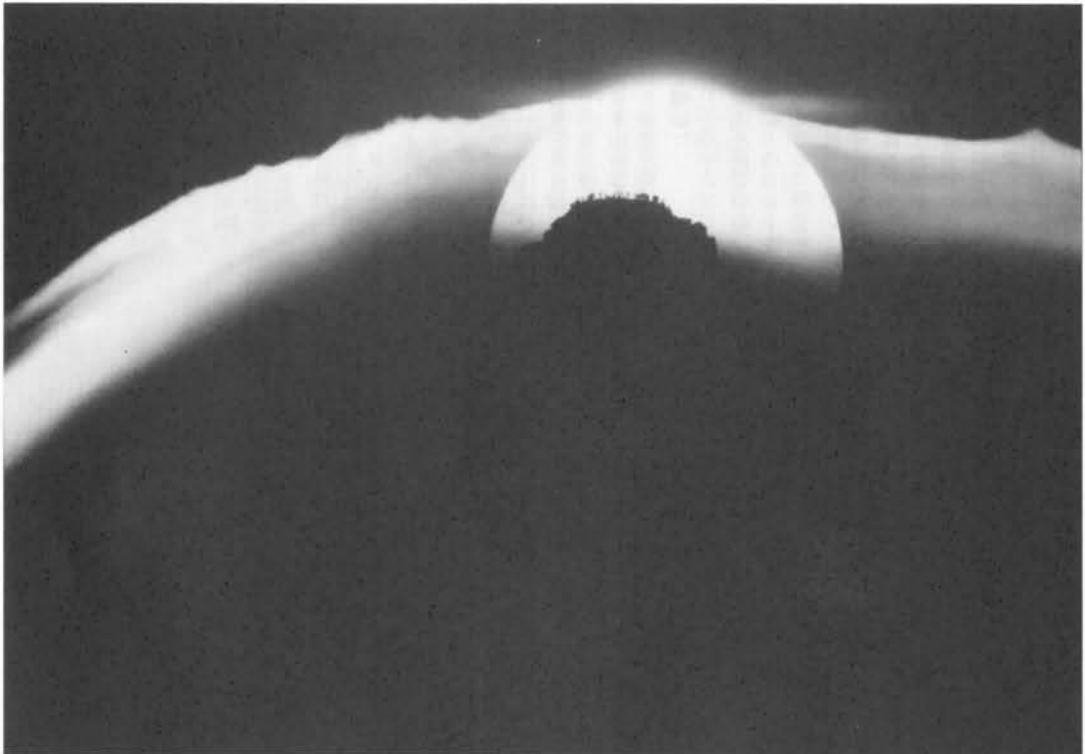
山と博物館

第46巻 第10号 2001年10月25日

市立大町山岳博物館

特集 大町山岳博物館創立50周年記念 特別企画

「日本山岳写真協会松本支部展 ―北アルプス・山のたより―」10/21(日)～12/2(日)



旭光を受けシルエットに浮かぶ登山者たち（槍ヶ岳） 撮影 佐々木 信一

開催にあたって

大町山岳博物館創立五十周年を記念する特別企画展が今年の春以降すでに三回にわたって開催され、入館者の多くから好評をいただきました。そして、この特別企画展の締めくくりとして「日本山岳写真協会松本支部展 ―北アルプス・山のたより―」を開催いたします。

日本山岳写真協会は、「山岳自然をテーマにした写真映像に広範な創作、研究、発表などを行う作家集団」で、一九三九年(昭和十四)に東京山岳写真会を母体として設立され、平成十一年には創立六十周年を迎えた歴史ある写真家集団です。現在、全国で八支部が活躍されていますが、今回出展いただく松本支部は、東海支部とともに最も古く、一九七七年(昭和五二)に設立されました。平成に入ってから、六年に北陸支部、七年に南信支部、八年には関西支部など、新しい支部が次々と設立されています。

現在、松本支部会員は三十七名を数え、毎年支部展を開催する一方、写真集『北アルプス・四季の彩り』(信濃毎日新聞社、一九九六)を発刊するなど、写真家集団として旺盛な活動をされています。

今回の写真展は北アルプスの雄大な峰々をはじめ、高山植物や蝶の姿などを交え、各会員の多様な個性がそれぞれの視点でとらえた四季折々の北アルプスの写真作品百二十点ほどを展示いたします。

これら「山のたより」は、各会員が各々のモチーフに沿って、山から受けた深い感動を写し撮った作品ばかりです。自然がもつ四季折々の表情は荘厳で神秘に満ちたものであり、作品を通して私たちにも、山の姿とそこで得られる感動を届けてくれます。「撮り残した山、撮りたいモチーフはたくさんある。これからも体力の続く限り山の写真に挑戦したい」と胸のうちに吐露された会員もあり、その旺盛な気力と山岳写真へ寄せる熱き思いに敬服させられます。同時にまた、山とはそれほどまでに人の心をとらえて放さないものだと思います。

創立五十周年記念にともなう特別企画展は、今回をもって最後となります。この機会にぜひ多くの皆さまに大町山岳博物館へ足をお運びいただきたいと思います。うご案内申し上げます。

市立大町山岳博物館

大町山岳博物館創立五十周年記念事業実行委員会

北アルプス・山のたより

日本山岳写真協会松本支部

「山岳写真の魅力」

佐々木信一

北アルプスは日本の山々の中で最も際立つ山容を見せ、その特徴ある峰々は、縦走・登頂は勿論、写真撮影の被写体としても私達を魅了してやまない。

夏山シーズンを迎えると、尾根道は登山者で大変な賑わいを呈し、自然と人間のさまざまなドラマが展開されている。なかでも槍・穂高は、写真愛好家にとっては最も魅力的、かつ絶好の被写体であることは言うまでもない。ひととき鋭く天を突く雄姿、垂直な岩壁がひしめき合う岩峰群。それぞれの山が持ち合せている個性あふれる風貌が、季節を変え、

時間を変えてさまざまな角度から撮影され、数えきれない作品が発表されている。

山岳写真の魅力は何と云っても、山それ自体が持っている圧倒的な存在感や、大自然が演出してくれる四季それぞれの神秘的で感動的な情景を捉え、それらを自分なりに表現できることにある。一方で、山そのものが持ち合わせている絵になる風景に、つい惑わされ短絡的にシャッターを押してしまう危険性もはらんでいる。

技術革新に伴いカメラ、フィルム共に性能が向上し、誰もが手軽に美しい写真が撮れる時代となった今、山岳写真を専門とする私達は山の美しい姿だけにとらわれず、これまで以上に感動を伝えられる作品創りに励みたいと思う。

(日本山岳写真協会松本支部支部長)

「燕岳と蝶岩」

赤沼淳夫

燕岳は全山花崗岩の白砂と、緑の這松とのコントラストが素晴らしく、浸食された奇岩群が屹立していて、一種独特の幻想的な雰囲気を持った山である。

古くからプロカメラマンの格好な被写体として注目を集めてきたが、近年はカメラブームで、写真愛好家の人気の的になっている。

燕岳は何といっても岩の面白さにある。岩には眼鏡岩、蛙岩、イカル岩、蝶



「燕岳と蝶岩」 赤沼淳夫

赤沼淳夫



「十二月」 赤羽可行

岩などと、さまざまな名前が付けられ親しまれている。これらの岩は時々刻々と表情が変わり、とくに風雪の後など趣があつて面白い。私は十月下旬から十一月月上旬にかけて、うすうすと新雪をまとった岩が好きである。

「十二月」

赤羽可行

登山シーズンの喧騒も一段落つき、訪れた山は新雪が輝きはじめ出す十二月。

やはりというか案の定、そこには静寂そのもので日の出を見て、枝に積もった雪の気温の変化にはじけ散る枝の音が、近く遠く響いている。バサッ、バサッ、バサッ。誰もいないこの場所で、ましてやこの深い山間にもこの枝のはねる音は、けつこう響くもので不気味な気配を覚える。

穂高には頂上に立ったときの思いと、頂きをみつめるときへの思いと……。

みつめられ続ける穂高もたまったものではないと思うのだが、そこに道がある限り人は頂上に立ちその頂きをみつめるものである。



「ある山行」 飯澤元啓

そして、今年もまたこの時期、訪れている自分がいる。これって何なのだろうか？と頭の隅をかすめる……。

約束のない約束とでもいおうか、無言の相手に答えを求める手段はひとつとしてなく、いつもの通り訪れるしかないであろう。

十二月の声を聞くと心浮き立つ自分がそこにある。

「ある山行 ―風雪の銀ブラ―」

飯澤元啓

○当初計画……

燕岳・槍ヶ岳（表銀座、冬の山稜漫歩）

○しかし現実……

七泊八日で燕岳・大天井岳往復（大天井岳にて四日間の沈殿）

○メンバー……

三十路は過ぎてしまったが、まだ我山岳会の最年少メンバーである。将来は聖職に就く身でありながらひどく俗物的な若者約一名。



「朝日に輝く不帰ノ剣」 内川芳郎



「冬の爺ヶ岳東尾根」 上田栄次郎

急登が深い森林の中を縫うように続き、降易するころ、雑木林もぬけ高山性の樹木が現れる。この辺りまで登ってくると展望もひろがってくる。

冬山入門コースといっても、かなり厳しい箇所があり、やはりベテランの指導者がいてほしい。後立山特有の豪雪は、一晩で天幕を押しつぶすほど降り、脱出不能になることはしばしばである。かなり昔のことになるが一週間雪が降り続き天幕の埋まる恐怖感を味わった思い出がある。明けても暮れても天幕の掘り出し作業。ついに頂上を見ずに里へ降りて来た。今思えばそれも楽しかった。

後立山には、冬山入門コースがいくつもある。遠見尾根、八方尾根などはその代表格であろう。しかし、いずれも下部にスキー場があり、かなりの高度までリフトで登ることができる。その点、爺ヶ岳東尾根は取り付きから急登で雪が深い

ときなどラッセルに悩まされる。人工的なものを利用せず、より冬山らしい厳しく原始の匂が残っているルートではなからうか。

樹林をぬけると肩が左右に張つた力強い鹿島槍ヶ岳を見る。やせ尾根から爺ヶ岳東面の広い斜面が山頂につづき、残月が雪の稜線にかかった朝のひと時など忘れることが出来ない冬山山行の思い出として残っている。

「朝日に輝く不帰ノ剣」

内川芳郎

五月連休を利用して唐松岳に行った。八方尾根は、下の樺より上部はまだ冬山の世界であるが、この時期、唐松岳を目指す登山者も多く、このコースの人気の高さが伺える。途中からガスがかかり、唐松山荘脇のテントサ

ちょっと飲みすぎると、すぐだらしなくなる自称「酒豪」の中高年その一。

現役最年長会員で自称「二十世紀的ABOUT人間」の中高年その二。

以上の三名。

○山行記録：

沈殿四日が教えてくれた
短い夜と長い昼、時間の浪費の楽しさを！
沈殿四日が教えてくれた
男と女の偽りと男と男の偽を！
他人同志になることを！
沈殿四日が教えてくれた
風の銀座の！ 雪の銀座の！
「銀座の冬の物語」

「冬の爺ヶ岳東尾根」

上田栄次郎

イトについたときは、ちょっとした吹雪になっていた。

次の朝もすっぱり濃いガスに包まれ、終日テントの中で沈殿。

三日目の朝、ガスは消え、日の出前の凜とした蒼い世界に鰐岳や五竜岳がくっきりと見えて快晴の朝を迎えた。前夜の吹雪で新雪をまとった不帰ノ剣三峰の山肌には、刻々と色を変え朝日が射して、すばらしいシーンを次々と見せてくれた。このとき興奮して喉が渇き、フィルムのシールを貼るのに手間取ったことを覚えている。この写真は朝日が白い輝きになったときのカットだが、手前の雪庇のシャドーが、とてもきれいなブルーに再現されたのは予期せぬ成果であった。



「ツクモグサ」 服部茂樹

「高嶺の花を求めて」

服部茂樹

山での楽しみと言えば、私の場合高山植物との出会いである。長い冬の間、雪や厳しい寒さに耐え忍び雪解けとともに活動を始め、美しい花を咲かせるその姿に感動せずにはいられない。

また、花の色もいろいろで形も千差万別である。自然が造り出す造形美にはいついっ心奪われてしまう。そんな花々の魅力を少しでも多く引き出し、写真に残していきたいと思う。

日本の高山植物はある図鑑によると九五三種ある。花もそれぞれ個性があり、咲く場所も時期も違う。同じ花でも山によって、色、形、咲く時期など様々である。

まだ実際に見たことのない花も沢山ある中で、これからもそれらを探しながら山に足を運び自分の気に入った写真を撮っていききたいと思う。

「朝陽さす薬師岳」

平瀬貴志

雄大な薬師岳が、朝陽を浴びて赤みをおびてきた。ここまで来ると登山者はごく稀で、今朝は一人だけの夜明けとなる。

山深い奥黒部の原始性を秘めた、この最奥の竜晶池に薬師の山容が映り、言葉に言い表わせない程の感動に浸ることができた。

池の周辺の花々も、昨夜の雨をしっとり含み、露玉の光る中で心ゆくまで楽しむことが

できた。

「照耀の山肌」

藤田邦子

登るたびにことに表情を変え山では、同じようなシャッターチャンスに出会うことはほとんどない。最近のように温暖化の傾向で気象条件が変わるとなごさらのことで、自然の変化を身近に感じながら、モノクロームの写真に魅せられて雪山の撮影を続けてきたが、降雪の時期がずれて雪山の美しい写真が撮りづらくなったように思う。夏の気候が影響して、美しい紅葉の年も少なくなったのではないだろうか。四季の移ろい方で難しくなる撮影条件であるが、感動する美しい光景にめぐり合えることを期待して山へ通っている。

春、アルペンルートが開通した初日に室堂に入り、立山の西壁を切り取ったこの「照耀の山肌」は好きな作品の一枚であるが、少し古いネガのため、同じような雰囲気的情景をものにしたくて何度も室堂に通ったが、満足



できる作品は撮れなかった。一見、なんでもない、いつでも写せそうな作品ながら、私にとっては貴重な一枚になっていた。

「冬の撮影山行」

古畑茂男

年末年始の休日を利用し常念岳に向かう。

夜は山頂直下の斜面にできた吹きだまりに雪洞を掘った。少しでも快適に過ごせるようにと、作業は日が暮れるころまで続いた。

雪洞はいい。外がどんなに荒れようとも静かで暖かい時を過ごすことができる（もちろんテントに比べての話だ）。

ローソクの明かりだけで充分に明る物を置く場所が欲しければ壁をちよつとばすぐに立派な棚も作れる。

ただ心配なのは外の光が入らない上に静か
さるため、つい寝過ごしてしまい朝の撮影
タイミングを逃がしてしまうことだ。

腕時計の小さなアラーム音に起され、もう



少し暖かなシユラフに留まりたい気持ち振
り切つて雪洞から出ると、朝日に槍ヶ岳が染
まり始めていた。

「初冬の槍ヶ岳」

穗刈貞雄

夜明け前の山荘の暗い土間で、ヘッドランプの灯をたよりにアイゼンをつけ、凍った雪の上をザクツザクツと軽い音をたてて大喰岳の頂上をめざす。空には星が輝き、常念岳の右肩の空がほんのり明るい。大喰岳の雪田に凍える手で三脚を立てて日の出る一瞬を胸をワクワクさせて待つ。それは私には至福の時であった。そんなことを数年前まで何回繰返したかわからない。しかし最近足腰が弱くな



り、雪の急坂は登りとはかく下りは自信がなくなっていました。私も本年八十歳になる山荘を経営しながら約四十年間飽きもせず山の写真を撮ってきた。若いころは山荘経営で忙忙のため遠くの山へはなかなか出かけられなかったが、今は時間の余裕ができたが、体力が落ちて遠くの出や雪山は無理がきかなくなりました。撮り残した山、撮りたいモチーフはたくさんある。これからも体力の続く限り山の写真に挑戦したいと思っている。



(50音順・日本山岳写真協会松本支部会員)

山と博物館第46巻第10号

発行 千 長野県大町市大字大町八〇五六―一

TEL 0261-31022

印刷大系
タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)

.....